



[平成 30 年 11 月 14 日 定例会発表要旨]

## スキーによる北歐交流と手稲山への想い

札幌手稲スキー協会 会長 井 幡 篤 憲 氏

スキーは、私が最も親しんできたスポーツです。居を構える稲穂より毎日手稲山を望んでいますが、この山が皇室と深い関わりのあることは、案外知られておりません。1926 年、日本初の西洋式の山小屋「パラダイスヒュッテ」が手稲山に完成しました。1928 年 2 月に来道された秩父宮様は、当時の北大スキー部長 大野精七教授の奔走によって、このモダンな山小屋に泊まれ、雄大なスロープを堪能されました。そして、「将来 日本でオリンピックを開催したら、山が近い雪質に恵まれ、しかも大都会で大学もある札幌において他にない」と語られたそうです。これが『宮様スキー大会』の開催や札幌スキー連盟の設立のきっかけとなり、やがて冬季オリンピックへと発展し、いまま宮家と繋がりのある競技大会が北海道で開かれるに至ります。



私は 1968 年にスキー指導員の資格を取得し、札幌スキー連盟でも本年 10 月まで役員等を務めてきました。札幌は、大会運営能力はもとより スキー環境も世界屈指と関係諸国から評価を得ていますが、いかにせん競技力においては中途の域を脱しきれておりません。その課題を克服すべく、ジャンプなどノルディック競技の先進国 フィンランドとの相互交流事業に長らく携わり、現在は北海道フィンランド協会の常務理事に就いております。

交流でとくに思い出深いのは、ラハティで開催された『子どもの冬のオリンピック大会』です。ラハティは 1938 年の世界選手権大会で日本からすでに選手が参加したほど、長い付き合いのある街です。子どものためのこの大会は地元の新聞社とスキークラブが主催し、距離スキーとジャンプが行われますが、特筆すべきはボランティアスタッフの質の高さです。たとえばジャンプの審判員は国際競技審判員の資格を有する人たちが手弁当で参加しています。フィンランドはコーチ養成の先駆けとなった国でもあり、アタッシュ（選手団と大会運営のサポート役）を務める私にとっても、多くを学べる機会となりました。ここでは、他の種目も知ってもらおうとバイアスロンの銃（実弾無し）に触れたり、映像を見ながらジャンプ台からの飛躍を仮想体験したり、子どもだけでなく大人も楽しめる催しもさまざま用意され、楽しく冬を乗り切つてゆこうという人々の姿が印象的でした。



札幌国際スキーマラソン大会 交歓会にて(1998年)

スキーを通して私には数え切れない出会いがあり、それらは全て貴重な財産です。最近、子どもたちのスキーに親しむ時間が減りつつあることを聞きました。また、手稲山には幻に終わったジャンプ台構想もあったようです。北海道出身選手の活躍を考えると、複雑な思いもよぎりますが、“テイネ”に再び若者が集うことを願って、今後もスキーの普及と人材交流に努めてまいります。 [文責：菅原]

次回予定 ⇒ 「北海道の恐竜とアンモナイト」大和治生氏（手稲中央小教諭）／1月9日（水）18:15～／手稲区民センター 3階 視聴覚室

## ◆ 研究会協力事業 「新川」流域の歴史を学び 新たな魅力をさぐる…

12月1日、新川流域を楽しくする会（永井道允 会長／事務局：手稲郷土史研究会内）によるシンポジウム『新川ルネサンス～新川の新たな可能性を探る』が「四季彩の街会館」で催され、地元の前田地区をはじめ、富丘・曙・星置の各地区、南区、石狩市などから63名が参加しました。

このシンポジウムは、新川開削130年を記念して開かれたもので、手稲郷土史研究会が企画・運営に協力。濱埜静子会員（野外博物館 北海道開拓の村ボランティアガイド）が進行役を務め、5名の皆さんが登壇しました。

基調講演を行った当研究会の渡部孝次会員（四季彩の街 ティネニュータウン町内会会長）は、明治期における新川開削の目的や運河としての可能性の追求などについて語り、さらには河口一帯の海浜公園化の推進を訴えました。※会報『郷土史でいね』第100号・第127号・第131号参照

パネリストの石狩市郷土研究会会長 村山耀一氏は、「新川今昔物語」と題し、石狩低湿地帯の土壌改良のために新川の開削が始まったこと（大原野排水）、樽川地区は新川を基線として“殖民地地区画”がなされたこと、流域の泥炭層地帯では現在のホクレンの前身組織によって“草炭”が生産されていたこと、幼少期は土功川でよく遊び 素掘りのままの当時の新川は土手と水面の高低差があまりなかったこと、ぬかるんだ悪路にまつわるエピソードなどをご自身の思い出を交えて話されました。当研究会の村元健治会員（星置地域の文化史跡遺産保存委員会委員長）は、「花畔・銭函間運河～新川河口は歴史の縮図」として、新川と交差する花畔・銭函間運河の経緯や新川河口の歴史的価値と自然の魅力を紹介し、「北海道造林合資会社」について発表した沖田紘昭会員（前田第一町内会 副会長）は、手稲山に源を発する中小河川が山麓や平野部に土砂を堆積させたこと（扇状地）、造林会社は手稲山の植林に携わっただけでなく“軽石軌道”（軽川・石狩間の馬車鉄道）の設立に尽力するなど公共奉仕の企業であったことにも触れました。また、釣本峰雄会員（NPO シャーロム代表・石狩市郷土研究会会員）は、手稲前田から石狩生振まで続く「紅葉山砂丘」について、砂丘は縄文海進によって石狩平野が海に沈んだ時代に形成された砂洲で その痕跡が現在も一部で見られること、花川付近の遺跡では多様な出土品が確認されていることなどを発表しました。



シンポジウム会場風景



パネリストによる発表

その後の意見交換では、「新川に屋形船を運行させたら将来の観光につながるのではないか」という夢のある提案も参加者から出され、新川の新たな活用法に思いを巡らす有意義な会となりました。

〔菅原〕

★「北海道文化財保護功労者」表彰を紹介 「北海道文化財保護功労者表彰は手稲郷土史研究会にとってたいへん名誉なことであり、広く手稲区民に知っていただきたい」という当研究会の願いに応えて、手稲区地域振興課が『手稲歴史資料展示コーナー』（手稲区前田1条10丁目 手稲区役所1階 情報提供室内）へ写真を掲示し、紹介してくれました。どうぞご覧ください。